

第八節 暗殺の結果	三九三
第九節 南支の内亂日本を「警戒」せしむ	三九五
第一〇節 日本米國市場に侵入す	三九五
第一一節 日米綿布問題	三九七
第一項 綿布関稅増率さる	三九八
第二項 日米綿業民間協定	四〇〇
第二三節 南支那の内亂—支那國民主義の擡頭	四〇二
第二四節 フォンント同盟—日獨條約	四〇六
第二五節 蔣介石拉致さる—反日感情の表明	四一〇
第一章 日本の内閣危機	四一一
第一章 結論	四一九

勃興日本と米國の輿論

第一章 旅順よりポーツマスへ

日露戦争中は米國の輿論は全く日本に同情して居た。アウトロック、リヴィング・エージ及びネーションの諸誌は其の社説に於て日本の利益を支持し、ニューヨーク・トリビュン、ニューヨーク・タイムス、ニューヨーク・ヘラルドの諸新聞紙は等しく親日態度を表し、ニューヨーク・タイムス・デモクラット、セントルイス・グローブ・デモクラット、クリヴランド・ブレイン・デイラー、ルイスヴィル・クリーリアーナル及びデンヴァー・デイリー・ニュース等の南部及び中西部の諸新聞も亦同様であつた。西部地方の諸新聞も等しく同論調であり、其中にはサンフランシスコ・コール、サンフランシスコ・エグザミナー、ローサンゼルス・タイムスの諸紙が有つたが、殊にルイスヴィル・クリーリアーナル紙の如きは『米國民同情の大勢は日本側に在る』とまで言ふ程であつた。(一九〇四年二月二十九日附)

米國は日露戦争中日本の勝報到る毎に喝采して喜んだが、ルーズヴェルト大統領は獨佛兩國に對し、若し彼等にして露國側に參戰するに於ては、米國は日本側に立つて參戰するに至るべき旨通告を發する程であつた。(ルーズヴェルト文書一九〇六年—一九〇九年。以下ルーズヴェルト文書として引用) 米國民は日本を以て自衛の戰爭に従事するものなりと確信し、當時世界に怖れられた大國露國と戰爭する日本の勇敢は彼等の絶賛する所となつた。日

本の海上・陸上に於ける勝利、其の卓越せる裝備、近代的病院、捕虜に對する人道的待遇等は米國民の最も聽かんとする所であつたが、他方新聞紙は擧つて露軍の腐敗、慘忍行爲を盛に書き立て、以て敵の影を薄らげるに努めた。(トリーター著「日本と合衆國」一八五三年—一九二一年)

一九〇四年二月八日、日本の水雷艇が旅順港外に露國の艦隊を攻撃して以來、陸に海に激戦を重ねて、翌年一月一日に旅順を占領した。ニューヨーク・サン、ニューヨーク・ワールド、ウィルミントン・モーニング・ニュース、シャーロット・デイリー・オブザーヴァ、ノーフォーク・ヴァージニアン・パイロット、フロリダ・タイムス・ユニオン、インディアナポリス・ニュース、セントルイス・グローブ・デモクラット、ピスマーク・デイリー・トリビューン、サンフランシスコ・エグザミナー、サンフランシスコ・コマール・ニュース紙等、米國は文字通り東の涯から西の涯迄打つて一丸となつて、この日本の一大快捷を激賞し、財界も大學方面も齊しく、日本のこの躍進は、實に文明の伸展を意味するものだと確信するのであつた。(エドウィン・マックセー著「現戦争」於て吾人の日本に味方する理由)

然しながらこの大衆の輿論の外には少數の異論があつて、其反日感情は此時漸く擡頭し、サヴァ・ニュース、モビル・レジスター、ローサンゼルス・タイムス紙等に、露國の敗北に對する同情的社説を散見する様になつた。

旅順の陥落を以て世界は戦争の終結を希望し、米國はヘイ國務長官を通じて戦争を終結する目的を以て調停に應ずるや否やを確めんと試みた。然しながら、平和の曙光は見えなかつた。

戦争の進行につれ、米國の論調は、利他主義の目的の爲に戦ふ若き國民の典型としての日本を賞揚し、戦捷毎にその熱烈の度は加はつた。三月十日奉天の大合戦において日本が決定的勝利を獲得し、五月二十七日八日對馬沖に大勝利を博するに及び、全米はこれを歡呼して迎へたが、デューイー提督を始め海軍の將星はこの快報に呼吸もつかず聽入つて『偉なる哉』と絶讃した。(一九〇五年五月二十九日附ニューヨーク・クロニクル)この感歎は常に軍人よりのみならず、全國津々浦々に聞かれた。東部ではニューヨーク・トリビューン、ニューヨーク・グローブ、フィラデルフィア・プレス、フィラデルフィア・インクワイアラー、ワシントン・ポスト、ワシントン・スター、南部にはリッチモンド・タイムス・デイリースパッチ、ニューオルリーンス・タイムス・デモクラット、ニューオルリーンス・デイリー・ピカニオン、中西部にはシカゴ・トリビューン、インディアナポリス・ニュース、セントルイス・グローブ・デモクラット、西部にはタコマ・デイリー・レジャ、サクラメント・ユニオン等の諸新聞紙は歡呼の社説を掲げてわが事のやうに雀躍した。

この頃迄は米國民は日本の戦争目的は全く利他主義であつて、日本は朝鮮に於て行動の自由を獲得し、露國は日本に樺太を割譲し、償金を支拂ふべく、旅順はこれを支那に返還し、滿洲鐵道は國際管理下に置かれるものと信じて居た。かゝる目的に對して米國大衆は日本に同情を寄せて居たのであつ

たが、日本が旅順陥落の後、滿洲に於ける露國の權利讓渡方の要求を擴大しつゝあることを知るや、米國民は非常に驚き、繼てその好感は變じて、日本の政策に對する熱烈なる歡呼を潛めるに至つたのである。

四

日本は旅順を獲得したが、滿洲は列強の管理下に支那に返還さるべきものだ、ルーズヴェルト大統領は信じて居た。大統領は日本の要求に對しては、唯一の條件を附する意思あることが間もなく明らかとなつた。それは即ち滿洲に於ける門戸開放を尊重し、その領土を支那に返還する明確なる保障であつて、日本は一九〇五年四月これを保障する所があつた(ルーズヴェルト)。この談判中、大統領は日本の方針を大に警戒するに至つた。大統領は、日本がこの上にも國際問題に支持を必要とするや否やに疑念を抱懐するに至ると同時に、その維持せんとする極東における勢力均衡に關心を示して來た。

大統領は日本の比律賓及び布哇に對する關係並びに門戸開放に關し、始めて憂慮の色を示すに至つた。戰勝の結果として日本の膨脹が、繼て米國及び支那との間に領土上の紛争を惹起するに至るなきやを疑ふに至り、タフト陸軍長官に宛てた二月九日附書翰において『カーター氏と意見を交換して、同島に二、三箇聯隊の駐屯を必要とせざるや否やを研究せらるるは機宜の措置に非ざるや?』と述べた。(ルーズヴェルト)(註)

(註) 布哇知事カーターは同島に在る日本人の數が遙かに白人の數を超え、日本の勝戦に狂喜し重大問題を惹起しかねまじき氣

勢を揚げつゝある旨を報告した。

ル大統領は比律賓に關し下院陸軍委員長J・A・T・ハルに對して『日本は比島に對し意圖あるもの如く傳へられるも、予はその真正ならざるを望む。否、予は眞ならざるを信せんと欲する。日本人の性格に稱讚すべきものが多々有るを認める予は、日本人を好み、その幸福を祈るからである。ただ比律賓が外敵に侵寇されざる程度の軍備の必要なるを確信するものである。』

又ルーズヴェルト大統領は東京駐在のアウトルック誌極東通信員ジョージ・ケンナンに對し、三月三十日及び五月六日附書翰において次の如く述べた。(前掲)(文書)

『……若し日本にして領取すべきものの限度を越えて、之を獲得せんとする場合は、恐らく列強は日本に反對するであらう。……予は日本の要求にして正當なるものなる限り、日本は合衆國の全幅の支持を得べきことを保障せんと欲する。』

かかる間にも親露派の底流は漸次勢力を得、新聞紙上に於ける論戰酣なりし頃にも増して、今や著しく強力になつて來たことを忘れてはならぬ。この對露同情の意見はシアトル・デイリー・タイムス、ローサンゼルス・タイムス、アイダホ・デイリー・ステーツマン、シカゴ・インター・オーシャン、シウタス・デイリー・タイムス及びマディソン・デモクラット等の諸新聞に現れたが、この親露態度は西部及び南部より東部の諸州に波及し、スプリングフィールド・リパブリカン・プロヴィデンス・ジャーナル、ホ

五

ルチモア・サン及びボルチモア・アメリカン等も亦これに左祖したのである。
六

ルーズヴェルト大統領の招請に應じ、日露兩國は一九〇五年夏ニュー・ハンプシャー州ポートマスにおいて媾和談判を開くことになった。露國が極東より驅逐せらるる結果、亞細亞における勢力均衡が失はれるが如きことなきやう大統領が周到なる注意を拂つたことは、そのタフト陸軍長官に宛てた次の書翰にこれを徴することが出来る。

『予は日本が朝鮮を支配し、旅順及び大連を保有し、哈爾濱、奉天及び旅順の鐵道を運轉し、而して滿洲を門戸開放の保障下に支那に還附するにおいては、日本の媾和條件を支持する。……賠償金及び領土問題に關しては、予は如何なる方法においても言質を與へる様なことはしたくないのである。』

又ヘンリー・ロッヂ上院議員に對する六月十六日附書翰においては次の如く言つた。

『日本は今や旅順及び朝鮮を保有し滿洲に支配力を有して居る。予はこの上は成るべく要求を輕減する事が日本の爲に利益なりと思ふのである。……露國の勝利は吾人第三國より見れば、即ち文明に對する一大打撃であつたらうと同時に、東亞の強國としての露國が崩壞することは亦不幸である。されば相互牽制の見地より、露國をして日本と相對峙せしむることが最上策である。』
媾和會議の當初日本の要求條件に對して、米國の輿論が餘り注意を拂つて居なかつたことは當時の

新聞論調にも窺はれた。日本の要求は必ずや公正なるものなるべしと思つて居たのである。ニューヨーク・ヘラルド、ニューヨーク・トリビューン、ニューヨーク・タイムズ、アトランタ・ジャーナル、プロヴィデンス・ジャーナル等の諸紙は、この戦争が領土擴張に出たものでないのだから、日本の要求は決して苛酷なものなからうと云ふ觀測において一致してゐた。而してこれは當時の米國全體に共通する意見でもあつた。かくて米國新聞論調は穩當なる條件の保障から、その苛酷ならざらんことの「希望」に變じたが、米國民の心裡には日本の動機に對する危惧が擦頭し、會議の進行につれて西部より東部に及び、ローサンゼルス・タイムズ、インディアナポリス・ニュース及びデトロイト・ジャーナルその他多くの新聞紙は、日本の要求をして中庸を得しむる爲に世界輿論の壓力に信賴するに至つた。

日本全權小村壽太郎男は、米國において教育を受け、米國の風習に慣れた人であり、露國の全權セルギウス・ウイッテ伯は米國に對しては傲慢なる態度を示す典型的露西亞人であつたが、米國人の心中に映じた兩全權の印象は全くその豫期に反した。即ちウイッテ伯は露國が米國民の尊敬を失つたことを感知し、これを回復することに努めたに反し、小村男は輿論の重大性を閑却し、日本の利益の爲にこれを善用するのを怠つた。ウイッテ伯は會議中その舉措巧妙を極め、日本の努力とその目的に對する米國人の印象を惡化せしめた。彼は平和締結を期待せず、この目的の爲に努力せず、たゞ露國の爲に米國の好感を繋ぐのがその目的であるもの如くであつた。露國は、日本の提出したる要求條件の大部

分を受諾したるのみならず、折衝巧妙を極め、進んで日本に對し同盟を提議し、露國は朝鮮・滿洲は勿論、支那に於ける日本の利益をも保障せんとしたのであつた。この態度の急變は米國の輿論を忽にして露國側に有利に轉回せしめた。ウイッテ伯は滿洲に關しては、支那が滿洲における商工業發達の爲に執る事あるべき各國共通の一般政策は、露國において敢てこれを妨害せざることを提議した。然るに日本はこれを拒絶した爲、米國大衆は日本の意向は、從來日本に期待したる利他的動機とは大に相距るものなることを知つた。これこそウイッテ伯が曝露せんとした相違點であつた。この方法でウイッテ伯は米國の對日印象を悪化し、反對に露國に對する好感を繋ぐことが出来た。商議進行につれて、米國の經濟界及び財界は、媾和會議において自己の重大なる利害關係が危険に直面しつゝあるを感知するに至つた。即ち米國の極東企業家、日本の優越に依つて影が薄らぐに至るなきかを疑ふに至つた。米國實業界の代表としてジョン・ハモンド(鐵山專門家、資本家)は本問題について次の如く言つた。

『この點に關し米國の利害は正に日本のそれと相反する。……その競争は苛烈なるものがあらう。日本が朝鮮及び恐らく滿洲にも及ぶべき宗主權を得たが爲に商業的に獲得した地位は、日本をして極東に於ける絶大なる競争者たらしめた。』

日本の要求で朝鮮及び滿洲における日本の眞意が明かになると、米國の感情は著しく變化した。その眞意なるものは、開戦に先立つ露國との談判において既に提議されてゐて、敢て秘密のものではなかつたが、米國民はこれを忘却して居たに過ぎない。而して彼等には朝鮮や滿洲における日本の行動範圍の限界が分らなくなつた。朝鮮の獨立は保障されては居ず、滿洲は行政改革を條件として支那に還附されると云ふ。かく日本が戦争に依つて物質的利益を期待するものであり、日本は決して利他的國民ではないと信せられる情勢を齎して、ウイッテ伯は露國の爲に一段と米國民の輿論を利用する機會を得た。

談判中の最大難關であり、ウイッテ伯が新聞紙を通じて米國大衆に働きかけたのは、債金支拂と樺太割譲とであつた。日本はこの二條件の貫徹の爲には戦争の再開をも辭さない態度を示したが、最後の決定では日本は樺太半部と無償金といふことに折合つた。日本がよりよき媾和條件を欲したといふので米國民の日本非難の聲は漸次擴大し、ニューヨーク・タイムズ、プロヴィデンス・ジャーナル、オマハ・ワールド・ヘラルド及びローサンゼルス・タイムズの諸紙に現れたが、フロリダ・タイムズ・ユニオン紙は八月十二日次の如く論じた。

『日本は地球全部を要求しなかつたであらうが、樺太半部を得たのは確に幸運であつた。』
ウイッテ伯並びにその代表部が言論界に得た勢力の結果、會議の終幕は殆んど露國の立場よりのみ解釋せらるることとなつた。解決が一つ濟む毎に、露國側に有利なることのみが強調されたが、これは恐らくウイッテ伯は進んで新聞紙に種々の材料を提供したのに反し、小村男は如何にも無口であつ

たのに原因するであらう。何れにせよ、遂に米國民衆には結局戦争に勝つたのは日本でなくて、露國なるが如く映じた。

ルーズヴェルト大統領は、會議に關する事實の曲解されて居るに鑑み、ジョージ・ハーヴェー宛九月六日附書翰において次の如く述べた。

『日本として、戦争の結果得た所が、最悪の條件であるといふことを、世人に言はしめるのは賢明であるとは思はれぬ。日本は大勝利を博し、又充分なる收穫も收めた。……かゝる事情の下において、實際要求すべき権利なき償金を得なかつたのであつて、それを媾和條件が全然不満足であるかの如く思はしめるのは愚であるといふ思はざるを得ない。』

一旦媾和條件が決定されると、米國輿論の大勢は再び親目的となつて来て、多數新聞紙はこれを以て合理的であると言ふに一致した。サンフランシスコ・エグザミナー、スポークン・スポークスマン、リヴリー、アイダホ・デイリー・ステーツマン、セントルイス・グローブ・デモクラット、モビール・レジスター、ニューヨーク・フィナンシャル・アンド・コマース・クロニクル、ニューヨーク・サンの諸紙、また雑誌にはアウトLOOK、ワールズ・ワーク、ハーバース・ウィクリー等亦同説を發表した。サン紙は『日本の絶大なる讓歩に依つて媾和條件は成立することになつた。』と言ひ、九月一日附スポークスマン・リヴリー紙は次の如く論じた。

『日本の威嚴も露國同様に危ぐなつた。日本が抛棄した要求を讓歩したとて、何も威嚴を失つたことにならぬが、日本側は最早この上の讓歩は出来ない。若し談判が暗礁に乗上げたら、その責任はロシア側に在るであらう。』

米國人の大多數は媾和條件には満足であつた。平和が克服したからである。殊に又多年米國の駐支公使であつたライオン・教授や、アットルック極東通信員ジョージ・ケナンの如きは日本はもつと好條件を得べきであつたと云ひ、又或者は露國はもつと恵まれてよかつたと論じた。極東における米國の投資家や商人は東洋における彼等の活動が、日本の爲に阻止せられることを恐れて媾和條約に賛成しなかつた。その外には、當時漸く盛になつた議論即ち白人種は露國を支援すべく、他人種の利益を擁護すべきでない、といふ人種主義の代表者もあつた。

會議の結果が日本に報道されると、東京では騒動が勃發した。而して米國に對する反感が全國に漲つた。米國の斡旋の下に開かれたこの會議に對する批難は、米國民を騙つて條約擁護に立たしめ、東部西部の多數の諸新聞は、日本はその非文明國たることを示すものであると攻撃したが、その他の新聞紙は南部の大多數のそれと同じく事件には同情的理解を示した。この事件に對する反動は米國民の對日態度の變化に現はれ、その全幅の支持に變化を生ずるに至つたのである。

一九〇四年及び一九〇五年を回顧するに、日本はその武力に依つて世界的強國となつたことは明か

である。日本は今や極東の領導權者となつた。日本は朝鮮におけるその政治的及び經濟的利益を世界に承認せしめ、露國の租借地南滿洲の支配並びに鐵道權の支配を得た。換言すれば日本はこの方面から露國を驅逐したのである。日本は隆々たる世界的強國となつた。西洋文明の形態を採用したる日本は、その希望の通り國際團體内に確乎不動の地位を占むるに至つた。然るに日本の成功と急激なる發展は、米國をして日本は極東における競争國であり、然も種々の點において對等であることを認識せしむることになつた。

二二

この認識を持つに至つた米國は、日本の動機に一層疑惑を抱き、最早日本の發展膨脹を後援しなくなつた。日本は今や成長したのだ。而して日米兩國は國家として平等の關係に立到つた。又兩國の友誼は續いたが、極東における國家的特殊利益はその態度に影響した。凡そ米國は極東において弱國を抜け強國を抑へ、以て勢力均衡を維持するに力むることを傳統政策とした。而してこの政策は年を経るに従つて明瞭になるのである。

ポーツマス條約は米國の對日感情の轉回を劃するものであるが、それも吾人が信する程に顯著なものではなかつた。この時は態度の反轉といふよりは、寧ろ日本の進歩に無暗に狂喜することほせず、米國が日本の躍進を是認することに疑惑を感ずるに至つたとも云ふべき程度のものであつた。媾和條件に反對する者は實本家、實業家、並びに滿洲が支那に無條件で還附せられるのに、特殊の利害關係を有する者等であつたが、何れにするも、米國の輿論が日本最負から一足飛びに反日に急變したと信するの蓋し誤である。

第二章 閉鎖さるる門戸

第一節 加州の日本人問題

一九〇五年に入りて、加州殊に桑港市民は、同州在留日本人が年と共に増加して來るに驚かされた。日本移民の原因は一九〇四年の支那人排斥法であつて、この法律に依つて同州の雇主は、永久にこの低賃銀労働者を使用し得なくなつたので、日本移民に絶好の機會を與へたのであつた。その後には戦後除隊された軍人、解雇された職工に依つて一層激化した長年に互る人口の重壓があつた。日本における生活の途は、急速に増加する人口の需要に應ずるには不十分であつた。第一に日本は小國で明治初期において既に人口頗る稠密となり、或地方の如きは一平方哩に千八百人と言ふ密度であつた。國內耕地は五分の一に過ぎない。尙その上に石炭及び鐵の生産乏しく、爲に國內の急速なる工業化を至難ならしめ、且今世紀に入る頃には出生率が増加して來た。かくて國內の社會的重壓の爲に、日本は一面過剩人口の海外移出に、他面にはその工業に必要な原料の輸入と製品の捌口に二重の努力を爲さなければならなかつた。この情勢が即ち日本人をして本國を出て、更に經濟的に惠まれたる出稼

二三